

平成 30 年 6 月 5 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K04440

研究課題名(和文) 美術科教育と特別支援教育との複合研究領域の創設と発展のための基盤的研究

研究課題名(英文) Development of an Interdisciplinary Research Field between Art Education and Special Needs Education

研究代表者

池田 史志 (Ikeda, Satoshi)

広島大学・教育学研究科・准教授

研究者番号：80610922

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、美術科教育と特別支援教育の複合領域を創設すること、そして国内外の研究者や実践者が本領域にアクセスしやすい研究基盤を整備することである。本研究の主な成果は次の3点である。1) 重度・重複障害児のQOLを高める造形活動の指導理論を体系的に示した。2) 全国の特別支援学校に所属する各学部の美術の主任教員を対象とした質問紙調査を行い、美術の実施実態、学生時代の学習機会、着任後の研修機会、指導困難事項等に関する統計データを示した。3) 美術科教育と特別支援教育の複合領域で活用できる研究方法として、質的研究、量的研究、ミックス法を整理した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to develop an interdisciplinary research field between art education and special needs education and to develop research and practical infrastructure that can be easily accessed by domestic and foreign researchers in this field. The results of this research are as follows: 1) We developed a teaching theory of formative activities to improve the Quality of Life of children with severe and multiple disabilities. 2) We conducted a questionnaire survey on art teachers who are heads of their departments of special needs schools throughout the country, and we collated basic data on the implementation rate of art practice, opportunities of professional development for teachers and the difficulty of teaching art. 3) Qualitative research, quantitative research, and mixed method techniques were arranged and shown to be research methods that can be used in the interdisciplinary research field of art education and special needs education.

研究分野：美術科教育

キーワード：美術科教育 特別支援教育 インクルーシブ 特別支援学校の全国調査 重度・重複障害 指導理論

1. 研究開始当初の背景

平成 24-26 年度に研究代表者が遂行した「重度・重複障害児の高次の造形活動を導く指導原理・方法の構築に関する研究」若手研究 (B) (以後、科研 I とする) では、肢体不自由特別支援学校においてエスノメソドロジーによる質的研究を実施し、重複障害学級で実施される造形活動における重度・重複障害児と教員との教材教具を介した関わり、教員による学習指導の方略、ティーム・ティーチングにおける教員間の連携を理論化した。その後、生成された理論に基づく仮説検証型のアクション・リサーチを実施し、重度・重複障害児の意欲の向上と能力発揮を促進する造形活動の指導理論を生成した。ただし、科研 I を終え次の 4 点が今後取り組むべき課題として残されていた。

【課題 1】

科研 I で生成した指導理論の有効性を再検証するためのアクション・リサーチが実施できていないこと。さらに、生成した指導理論の全体像を体系的に示せていないこと。

【課題 2】

全国の特別支援学校における美術の実施状況や教員の指導困難事項等の実施実態が統計的に示されていないこと。

【課題 3】

美術科教育と特別支援教育の複合領域で使用できる研究方法がまとめられていないため、新規に研究を始めようとする研究者・実践者のアクセスが難しいこと。

【課題 4】

中・軽度の障害児・者を含めた共生社会の実現を目指す、多様性理解のための取り組みが不十分であること。

2. 研究の目的

上記の課題を踏まえ、本研究では美術科教育と特別支援教育の複合領域の創設及び国内外の研究者や実践者が本領域にアクセスしやすい研究基盤の創出をめざして、【課題 1】から【課題 4】に対応する以下の 4 つの研究目的を設定した。

【研究 1】

重度・重複障害児の QOL (Quality of Life) を高める造形活動の体系的な指導理論を提示すること。

【研究 2】

全国の特別支援学校に所属する各学部の美術の主任教員を対象とした質問紙調査を実施し、美術の実施状況、学生時代の学習機会、着任後の研修機会、指導困難事項等に関する統計データを提示すること。

【研究 3】

リサーチ・メソッドに着目し、美術科教育と特別支援教育の複合領域で活用可能な研究方法を整理・提示すること。

【研究 4】

共生社会の実現を目指す、多様性理解のための理解・啓発活動及び教員向けの研修を行

うこと。

3. 研究の方法

【研究 1】

池田 (2014) で実施した特別支援学校の重複障害学級でのアクション・リサーチの継続研究として、さらに 2 回の仮説検証型のアクション・リサーチを実施した。1 回目は池田 (2014) と同一集団、同一対象児に対して行い、有効な授業改善の方策を明らかにした。2 回目は、異なる集団と児童を対象にしたアクション・リサーチを実施し、重度・重複障害児の QOL を高める造形活動の包括的な指導理論の有効性を再検証した。

【研究 2】

平成 28 年 3 月に実施した調査では、全国の特別支援学校 970 校 (分校除く) の小・中・高等部に在籍している美術の主任教員 2909 名に質問紙を送付し、美術の授業の有無、週当たりのコマ数、授業の単位時間、学生時代の学習機会、着任後の研修機会、指導で難しさを感じている事項、参考にしている資料等を調査した。

【研究 3】

美術科教育で用いられる研究方法を整理した。質的研究、量的研究、ミックス法による研究方法を比較することにより、目的や予想される成果に応じた研究方法の相対性を検討した。

【研究 4】

オーストリア、韓国、日本 (広島、東京) で多様性理解及びインクルーシブ教育への理解を目的とした造形ワークショップを実施した。また、特殊教育学会での自主シンポジウム (愛知) や特別支援学校の教員を対象にした造形活動指導のための研修会 (広島) を開催した。

4. 研究成果

【研究 1】

重度・重複障害児の QOL を高める造形活動の指導理論を、「確定的実態の把握」、「題材開発」、「授業実践」、「評価」、「変動的実態の把握」、「授業改善」の 6 項目で体系化した。本理論では、指導を困難にしている要因である同一集団内に在籍する多様な実態の児童生徒の実態を 4 類型で把握・整理する実態把握の指標、個別の実態に応じた適合可能性の高い教材教具の作成原理、児童生徒の認知的発達段階と教員による支援の段階とを連動させた関わりの構造、そして、探索的な評価と評価結果に基づく創造的な問題解決を促す授業改善の方法・手順等、各項目が共有部分を含みながら順次展開する包括的な造形活動の指導理論を提示した。

関連する文献・発表は次の通りである。

【雑誌論文】⑤⑧⑨⑪⑫

【図書】①

【学会発表】⑩⑫⑬⑰

【研究2】

質問紙調査では、821名から返信があり、その中から回答に不備が無かった508名分を分析した。その結果、99.2%の特別支援学校(学部)で美術の授業が実施されており、授業は週に平均1.8コマ、単位時間の平均は48分であった。しかし、学生時代に障害のある子供達を対象にした美術の授業を受けていたかどうかを問うた質問では「全く受けていない」と「ほとんど受けていない」の合計が90%となった。さらに、着任後の研修の機会に関する質問では、教育委員会主催の研修の機会が無い56%、校内の教科会等での研修が無い72%、自主的に開催される研修が無い84%であった。これらのことから、校種を問わず、全国のほとんどの特別支援学校で美術の授業が実施されているにもかかわらず、教員は、養成課程及び着任後を通して障害のある子供達を対象にした美術の指導に関する学習・研修の機会を十分に得られていない実状が明らかとなった。他方、「研修があれば参加したいか」という質問に対しては、「思う」、「内容がよければ参加したい」の合計が94%となり、教員の学習意欲に対して十分な学習・研修の機会が保障されていないことも指摘した。

関連する文献・発表は次の通りである。

〔雑誌論文〕①④

〔学会発表〕①⑥⑦⑧

【研究3】

重度・重複障害児の造形活動に関する一連の研究で研究代表者が用いた研究方法を整理した。特別支援学校の授業実践における教員の実践知・暗黙知の探究においてエスノメソドロジーやM-GTAを用いた質的研究を、全国の特別支援学校における美術の実施実態の把握において質問紙調査法を用いた量的研究を、そして、重度・重複障害児のQOLを高める造形活動の指導理論の仮説検証においてアクション・リサーチによるミックス法を用いたことを、研究目的と対応させて整理した。特に仮説検証型の研究では成果を測定するための量的データの使用が求められ、個別の研究目的に対応した評価法の開発が必要になることを示した。

関連する文献・発表は次の通りである。

〔雑誌論文〕⑥⑦⑩

〔学会発表〕⑨⑭

【研究4】

オーストリアのウィーンで開催されたInSEA Europe(国際美術教育学会・ヨーロッパ地区大会)でのワークショップには、6カ国から7名の参加があった。異なる文化的背景を持つ集団に対してiPadを用いた逆再生映像制作のワークを行い、協働的活動を通じた他者理解を図った。また、日本(広島)でも同様のワークショップを行い、10代~70代の参加者20名によるワークを行った。演

者、カメラマン、小道具、演出等、様々な役割のある活動は、個人を活動の中に明確に位置づけること、そして一人ではできない活動環境を設定することが必然的に協力関係を生みだすことを示した。

韓国の大邱で開催されたInSEA World Congress 2017(国際美術教育学会・世界大会)では、群馬大学の茂木一司教授を代表とするチームの一員としてワークショップを実施した。本ワークには10か国から22名の参加者があった。「Your Everyday Life」をテーマとし、日常生活で感じていることを色面構成で表現し、それらをグループで共有することで、多様な文化の理解を図った。また、日本(東京)でも同様のワークを行ない、日常を色で表現し、それを他者と共有する活動により、個人が持つ多層的な背景(家族構成、家庭環境、地域文化、価値観、慣習・慣例、ライフスタイル等)が浮き彫りになり、他者との交流により、それらが肯定的に受け入れられることが成果として示された。

愛知で開催された第55回特殊教育学会名古屋大会において、大学教員4名と特別支援学校教員2名による自主シンポジウムを企画・実施した。登壇者からは知的、肢体不自由、病弱特別支援学校、そして特別支援学校卒業後の自主的なサークルにおける美術の実践事例が発表された。指定討論では、探索的な目標設定の有効性や交流及び共同学習の可能性が示された一方、校種を接続させる学びの連続性を解明することが課題として示された。

広島で実施した、特別支援学校教員向けの研修会では、【研究1】の成果で示した指導理論をテキストとして演習形式で題材開発を行った。本研修では、版画をテーマにしたが、参加者が担当している児童生徒の実態を起点とした指導計画を作成する内容であったため、結果的には参加者それぞれのオリジナルの版画題材が完成した。本研修会には15名の参加があり、事後アンケートでは、知識が理解できたか(6項目)、技能が身に付いたか(4項目)、応用的に今後生かせるか(6項目)という質問を設け、5件法で問うた。その結果、各カテゴリーの平均が、知識:4.43、技能:4.23、応用:4.22となり、研修による一定の効果が認められた。

日本(広島)で実施した、造形ワークショップ「三度のメシより描くのが好き」では、障害のある方9名とサポーター5名の参加があった。ワークでは、描画指導は行わず、環境設定に注力した。多様な画材の準備による主体的な選択場面の設定や個別に確保された余裕のある制作スペースの設置により、障害のある人、無い人の両者が快適に安心感を持ちながら活動を行なえた。

関連する文献・発表は次の通りである。

〔雑誌論文〕③

〔学会発表〕②③④⑤⑪⑮⑯

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 12 件)

- ①池田吏志・児玉真樹子、特別支援学校における美術の実施実態に関する全国調査Ⅱ－各校種間における指導困難事項の差異について－、美術教育学、第 39 号、2018、39-49【査読あり】
- ②茂木一司・手塚千尋・佐藤真帆・笠原広一・池田吏志、文化多様性の理解を目的とした色彩構成ワークショップの開発、日本美術教育研究論集、第 51 号、2018、19-26、【査読あり】
- ③池田吏志・高橋智子・大江登美子・北島珠水・柴田洋佑・池永真義、インクルーシブ教育システムにおける美術(1)－特別支援学校および卒業後の多様な実践事例の検討－、特殊教育学研究、第 55 巻 5、2018、印刷中【査読なし】
- ④池田吏志・児玉真樹子・高橋智子、特別支援学校における美術の実施実態に関する全国調査、美術教育学、第 38 号、2017、45-60【査読あり】
- ⑤池田吏志、重度・重複障害児の QOL を高める造形活動の指導理論構築に向けた実証的研究、美術教育学研究、第 49 号、2017、33-40【査読あり】
- ⑥手塚千尋・佐藤真帆・笠原広一・池田吏志、美術教育の実践研究における研究課題とリサーチ・メソッドの選択に関する事例研究、日本美術教育研究論集、第 50 号、2017、35-42【査読あり】
- ⑦池田吏志、重度・重複障害児の造形活動における意欲と能力発揮を基軸とした QOL 評価法の開発、広島大学大学院教育学研究科附属特別支援教育実践センター研究紀要、第 15 号、2017、1-10【査読なし】
doi: 10.15027/42876
- ⑧若松昭彦・川田和男・木村彰孝・池田吏志・牟田口辰己・川合紀宗・氏間和仁・谷本忠明・林田真志・竹林地毅・船橋篤彦・河口麻希・本渡葵、「合理的配慮」実現につながる教材・教具づくり研修プログラムの開発、平成 28 年度広島大学共同研究プロジェクト報告書』、2017、17-26【査読なし】
doi: 10.15027/42711
- ⑨池田吏志、重度・重複障害児の造形活動のアクション・リサーチⅡ－造形活動における QOL 向上のための授業改善の方策－、美術教育学、第 37 号、2016、61-74【査読あり】
- ⑩池田吏志、アクション・リサーチの研究デザイン－特別支援学校の造形活動に関する研究を事例として、アートワークショップ実践による文化的・教育的環境の活性化実践報告書、2016、44-52【査読なし】
- ⑪池田吏志、特別支援学校における造形活動の題材、学校教育、1179、2015、14-21【査

読なし】

- ⑫池田吏志、重度・重複障害児を対象とした関わりに関する教育研究の動向と課題、広島大学大学院教育学研究科紀要第一部、第 64 号、2015、29-38【査読なし】
doi:10.15027/38941

[学会発表] (計 20 件)

- ①池田吏志「特別支援学校で実施される美術の指導困難に関する研究」第 40 回美術科教育学会静岡大会、2018.3.30、@滋賀大学
- ②池田吏志「三度のメシより描くのが好き」、広島県平成 29 年度障害者芸術文化活動支援事業との共催、2018.3.3、@広島大学
- ③手塚千尋・笠原広一・池田吏志・佐藤真帆・茂木一司「文化的多様性の理解を目的とした色彩構成ワークショップの開発」第 51 回日本美術教育研究発表会 2017、2017.10.15、@東京家政大学
- ④池田吏志・高橋智子・大江登美子・北島珠水・柴田洋佑・池永真義「インクルーシブ教育システムにおける美術(1)－特別支援学校および卒業後の多様な実践事例の検討－」日本特殊教育学会第 55 回大会 in Aichi、2017.9.17、@名古屋国際会議場
- ⑤Kazuji Mogi, Chihiro Tetsuka, Maho Sato, Koichi Kasahara, Satoshi Ikeda, Akiko Gunji, Fumihito Sunohara, Drawing on Diversity: How socially engaged art education promotes cultural diversity and strengthens community, 35th World Congress of the International Society for Education through Art, August 9, 2017, Daegu Convention Center, Daegu, Korea
- ⑥Satoshi Ikeda, A National Survey on the Implementation Realities of Art Education Under the Inclusive Education System in Japan. 35th World Congress of the International Society for Education through Art, August 8, 2017, Daegu Convention Center, Daegu, Korea
- ⑦池田吏志「障害のある子どもを対象にした美術科教育の現状・実践・課題」Seminar on Art Education 美術科教育における特別支援教育の実践と研究の現状、2017.7.12、@東京学芸大学
- ⑧池田吏志「特別支援学校における美術の実施実態に関する全国調査」第 39 回美術科教育学会静岡大会、2017.3.29、@静岡県コンベンションアーツセンター
- ⑨手塚千尋・佐藤真帆・笠原広一・池田吏志「美術教育実践研究のテーマ創出と方法論に関する研究」、第 50 回記念日本美術教育研究発表会 2016、2016.10.16、@東京家政大学
- ⑩池田吏志「重度・重複障害児の造形活動における授業改善の理論化」、日本特殊教育学会第 54 回大会、2016.9.17、@新潟日報メディアシップ

- ⑪ Satoshi Ikeda, Tomoko Takahashi, Cooperative Learning of Art Education Using iPads in an Inclusive Classroom. InSEA Regional Conference Vienna 2016, September 23, 2016, Austria University of Applied Arts Vienna, Vienna, Austria
- ⑫ 池田吏志「重度・重複障害児の造形活動ー美術科教育と特別支援教育の複合研究領域の創設に向けてー」、全国教育大学協会中国支部研究会、2016. 6. 25、@広島大学
- ⑬ 池田吏志「重度・重複障害児の QOL を高める造形活動の実証的研究」、第 38 回美術科教育学会大阪大会、2016. 3. 20、@大阪成蹊大学
- ⑭ 池田吏志「アクション・リサーチの研究デザインー特別支援学校の造形活動に関する研究を事例として」、教育フォーラム「アートの体験活動の普及を支える実践研究を考えるー美術館・学校・地域の美術教育の研究事例からー」、2016. 1. 31、@福岡市美術館
- ⑮ 池田吏志「多様な意味や価値を認め合う図画工作科・美術科の授業づくり」、すべての子どもが分かる喜びを実感できる教科の授業づくり、2015. 12. 20、@広島大学
- ⑯ 池田吏志「図画工作科・美術科におけるインクルーシブな協同学習」、すべての子どもが分かる喜びを実感できる教科の授業づくり、2015. 12. 20、@広島大学
- ⑰ 池田吏志「重度・重複障害児を対象とした造形活動のアクション・リサーチーMixed Methods を用いた造形活動の QOL 評価と仮説生成ー」、日本特殊教育学会第 53 回大会、2015. 9. 20、@東北大学

[図書] (計 1 件)

- ① 池田吏志、ジヤース教育新社、重度・重複障害児の造形活動ーQOL を高める指導理論ー、2018、497【単著】

[産業財産権]

なし

[その他]

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

池田 吏志 (IKEDA, Satoshi)
 広島大学・大学院教育学研究科・准教授
 研究者番号：80610922

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

茂木 一司 (MOGI, Kazuji)
 群馬大学・教育学部・教授
 研究者番号：30145445

竹林地 毅 (CHIKURINJI, Takeshi)
 広島大学・大学院教育学研究科・准教授
 研究者番号：50332169

児玉 真樹子 (KODAMA, Makiko)
 広島大学・大学院教育学研究科・教授
 研究者番号：10513202